

## 論証するには？

p.38-39で、段落においてトピックセンテンスを証拠として支えるサポーティングセンテンス、その詳細としてサポーティングディティールの文を置く、ということ学びます。

では、論を進めるうえでどのようなことが証拠となるのでしょうか。さらに論証、つまり論理的に証明するには何が必要でしょうか。論証の確かさは、一段落内でも、またレポート・論文全体の構造においても、その成否を決める鍵となります。

### ▶ 論証の根拠となるもの

学問分野やテーマによってさまざまで、事実やデータであったり、文献資料であったりするでしょう。いずれの場合でも、それが信頼に足る確かなものであるかを確認する必要があります。後述する「事実と意見の区別(p.44)」に照らしていうなら、論拠になるのは「事実」のみです。

- ・ 論拠とする「事実」に誤りはないか。
- ・ 調査や実験などのデータは偏りの生じないよう適切な方法で得られたものであるかどうか。他の文献やインターネットなどに掲載されているものを引用する場合は、その調査や実験方法の適切さを検討するとともに、そのデータが今なお有効か、時間が経って変化している可能性はないかも吟味することも重要です。
- ・ データや「事実」は結論を導くのに十分か。
- ・ 文献資料では、それが制作された時点の大元にさかのぼって原本のかたち（一次資料）、あるいはそれにできるだけ近いかたち（信頼できる翻訳・翻刻など）であるかどうか、また信頼できるか。二次資料・三次資料になると信頼性は下がります。

以上の諸点を確認したうえで用いましょう。

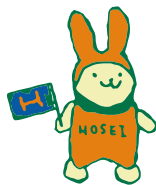
### ▶ 論証すること

適切な論拠に基づいて論を展開したとしても、そこに飛躍や不足があっては論証にはなりません。提示した論拠だけで、述べようとしていることが本当にそういい得るのかどうかを確認しなければなりません。たとえば、大学生についての調査データを提示して、現代の若者についての論を展開したとします。しかし「若者」には大学生でない人びとも多く含まれているわけで、大学生だけのデータでは不十分でしょう。あるいは、たとえば「法政大学のえこびよんは、これから学外でも人気が出るだろう」と述べるにあたって、えこびよんが本学でとても人気があることを述べるだけでは不十分です。前提として、ゆるキャラブームがあること、えこびよんもその一つであることも必要な情報です。

論拠の不足はないか、論に飛躍はないか、しっかりと確認しましょう。



えこびよん



2008年、当時の人間環境学部学生デザインによって環境改善活動推進キャラクターとしてデビュー、2013年にサステイナブル社会の実現をうたう法政大学のキャラクターに昇格

## ▶ 反対の主張や例外はないか

あなたが述べようとしていることに反する主張や事実がないかどうかをあらかじめ検討し、もしあれば提示し、論駁したり、例外として示したりしておきましょう。読む側の立場からみれば、別の可能性があらかじめ否定されていることで、主張の説得力が大きく高まります。

## ▶ 主張の確かさには段階がある

世の中、すべてを白か黒かでは語れないように、学術的な主張にも、100%の確かさでいえることもあれば、80%ほど、60%のこともあります。あるいは30%くらいの可能性しかない事実を指摘することもあるでしょう。「必ず」「すべて」なのか、「ほとんどの/たいていの場合」、「多くの場合」、「ときには」、「まれに」などと、どのような確率でいえそうなのか、慎重に提示しましょう。文末でも、「である/いえる」とするのか、「であろう/いえよう」とするのか、あるいは「あり得る」とするのかといった主張の強弱に注意して書きましょう。

# アカデミックライティングの基礎 -パラグラフとは-

大学における学術的な文章の書き方をアカデミックライティングといいます。アカデミックライティングはレポートの書き方の基本であり、作文、エッセイあるいは新聞記事の書き方とは異なっています。パラグラフは三つの構成要素から成り立ちます。次の例で考えてみましょう。

### 例文

夏目漱石門下の学者野上豊一郎は、法政大学史上、二つの点で重要である。第一に、本学が総合大学となるにあたって予科の中心となって多くの優れた教員を集めたことである。たとえば作家内田百閒や倫理学者和辻哲郎らである。そうして漱石ゆずりの野上の自由で批判的な精神が、本学の「自由と進歩」の学風の基礎となったのである。学生が主導して校歌が作られたのもこの時代である。野上の第二の重要な役割は、戦後最初の総長として、軍国主義的な体制を一掃したことである。人脈を生かして、リベラルで民主的な学者たちを本学に集め、戦後の復興を主導した。野上自身は志半ばに急逝するが、彼の事績が次の大内兵衛総長時代に本学が飛躍的な発展をみる下地となった。要するに、野上豊一郎は本学が今日のような「自由と進歩」の大学となるうえで大きな功績があったといえる。

